

# 特集

## あの頃

## あの時

恩 師 中 村 勤 先生

恩 師 高見澤 稔 先生

恩 師 樋 口 昭 三 先生

小 原 春 乃 (高3回生)

小 池 英 夫 (高31回生)

倉 田 貴 根 (高31回生)

横 田 はつき (高57回生)



## 二つが一つになる

恩師

中村 勤 先生

私が甲府二高に赴任したのは、西高に移行する二年前でした。それまで女子高にいたことがなかったので不安でした。女子ばかりの学校でうまくやっていけるだろうか、生徒はなついてくれるだろうか。三年八組の受持になり、取り越し苦労だったことに気付いたのは間もなくでした。二年に迫った学校の雰囲気はそれほど深刻なものではなかったようです。それより、二高の生徒として、気持ちを引き締めて悔いのないようにと努めているようでした。

新しい校舎の建築も始まり、引越しの方法や学校の運営について話し合いが始まり、いよいよ新しくなるんだという気分が強まってきました。新しい器に新しい魂を盛り込む気持ちが必要です。その時の二高生の気持ちは複雑なものだったでしょう。甲府二高というものが無くなってしまふのか、何か置き忘れてきたものはないのか迷ったことと思います。同窓会があります。甲府二高が甲府西高とただ接続したのではなく、二高の良き伝統が西高に引き継がれるのです。

しかし、私には不安になることが起きました。西高の最初の入試の合格発表の日でした。その日は雨が降りました。今まで見られなかった男子生徒が発表を見にきました。西高に合格した男子の気持ちが顔に現れて気の毒に見えました。中には傘を下に強くたたいている人もいます。新入生をいかに指導したら良いのか迷いました。同窓会の融合は、将来どうなるのか心配しました。その後の同窓会の様子は聞いていませんが、男子の入った会の運営は大変だったと思いますが、絆をしっかり結んで発展のため頑張ってください。

卒業後、同窓生として顔を合わせ、おしゃべりに興じること位有意義で楽しいことはありません。私も八十六になりました。八十の時に同級会が解散になり、寂しいものです。家にいてなんとか楽しみを見付け、したいことをしています。「日々是好日」の毎日です。



## 今徒然に思うこと

恩師  
高見澤 稔 先生

甲府二高に来て四年目、前年に引き続いて3年の担任になった。それが3年5組であった。だから担任した生徒諸君(嬢)とは僅か1年の付き合いと言うことになる。

原稿依頼を受け、当時の事を思い出す為に卒業アルバムを開いてみた。新谷由規子さんから渡辺正美さんまで44名。その前に副担任の吉野祥子先生が載っていた。

都留、谷村、峡北、韭崎を経て甲府二高に来た私にとって、初めての女子高だった。都留は定時制、谷村は普通科の他工業科、商業科があり、峡北は農業科があった。韭崎は共学であった。それ故か、甲府二高には今迄とは違った独特の雰囲気を感じた。

先ず“良い子”の集団であった。お互い牽制し合って“良い子”を演じていたのか、本来“良い子”だったのかは判らないままに終わった

何を言わなくてもよく掃除した。当時木造校舎の廊下を競って磨くのが流行っていたような気がする。

共学の学校では体育着の長いトレパンを着用するのが普通であるが、甲府二高ではブルーマーであった。千数百人、一人2本ずつ二千数百本の太ももが校庭に並ぶ姿は眩しく壮観であった。

当時は稀になっていた“上げば尊し我が師の恩”と歌って貰い、蛍の光を歌って送り出してからは、今でも時々接触のある人、年に一度の年賀状の人、卒業以来全く疎遠にしている人など様々であるが、皆何処かで夫々の人生を生きているものと思っている。

同じ職場で一緒に勤めた人もいる。結婚式の案内を貰い出席した人もいる。今、月に一度通っている病院の薬剤師も担任した5組の教え子さんだ。

あれから四十年余り、私も傘寿を過ぎて数年が経った。風が吹けば飛びそうと言われた細身も老年太りで人並みに、黒々ふさふさの髪の毛も殆ど白くなり、薄くなるなど大きく変わった。

17、8歳だった5組の少女達も同じように歳月を重ね今や還暦、様々な人生経験を積み堂々たるおば様に変貌しているのだろうなどと想像してみる。

卒業アルバムを見ながら、しばしいろいろとしてみた。

**プロフィール** 甲府一高・山梨大学数物科卒業  
県下8高校、県教委2課に勤務、甲府南高校長、県高等学校長協会会長、県高等学校囲碁連盟会長など  
県退職後、山梨情報専門学校長、日本棋院山梨県紫玉支部長など  
文部大臣教育者表彰、県政功績者表彰、瑞宝小綬章受賞  
趣味は囲碁、ゴルフ、人間観察



## 甲府二高での思い出

恩 師

樋 口 昭 三 先生

私が数学の教員として甲府二高に勤務したのは、昭和43年4月から昭和50年3月までの7年間でした。(年齢で40から46才)その最後の年に総合選抜のため甲府二高から甲府西高に名前が変わり、校舎も現在の処に移転新築されました。

私は昭和24年から平成元年まで40年間、県立高校の教員を勤め幾つもの学校を経験しましたが、その中で甲府二高が一番印象に残っています。

その思い出の1つに、当時学園祭の催しの中に「TPアワー」がありました。それは教師と生徒が一緒になって演劇をする催しです。毎年行われましたがその中で私が主役に抜擢<sup>?</sup>されたことがありました。1時間あまりの劇では、主役の台詞は膨大です。演劇など全く経験がないので、放課後や家へ帰ってからも台詞の暗記や練習を懸命にしたものでした。そして無事に終わることが出来好評でした。生徒にとっては演技の上手下手よりも、教師が生徒と一緒に劇することに歓声をあげたのでしょう。このような催しは当時の甲府二高でなければ出来ないことであり懐かしい思い出です。

平成元年定年退職した後は、第二の人生として自分の好きなことをやり、出来たら他人に役立つこと(社会奉仕?)もしようと考えました。

地域(甲府市北新地区)の文化協会や老人クラブの役員を引き受け、パソコンでの資料作りに忙しい時もありました。パソコンではインターネットでの囲碁対局もしています。

またホームページを作成して、旅行の記録や絵画作品の紹介等のページを毎年更新してきました。然し昨年88才の米寿を超えてもの忘れが多くなったので、こらで役職は後継者<sup>ひと</sup>にお願いし、H.P.の更新も終わりにしようと考えています。

機会がありましたらH.P.をご覧ください。<http://www4.plala.or.jp/Syo>(SyoのSは大文字です)

### プロフィール

出生 昭和三年、甲府市樋口家5人兄弟の末子として生まれる(名前の昭三の由来)  
 学歴 市立湯田小学校、県立甲府中学校、国立東京高等師範(現在の筑波大学) 数学科  
 職歴 (昭和24年県立高校教員に採用される、赴任順に) 甲府工業、甲府一高、市川、機山工業、甲府二高、峡北、甲府東、都留、第一商業(9つの高校を歴任)  
 趣味 囲碁、カラオケ等(但し、最近米寿を超えてから能力が次第に衰えてきた)



「4世代お世話になっています。」

小原春乃

(高3回生)

一昨年孫が西高に入学しました。西高は入学試験が大変だということで、孫は一生懸命勉強していた様でした。私は実家の母(平成18年に97歳で亡くなりました。)から始まって、私、娘2人、孫で甲女、二高、西高と4代にわたってお世話になる歴史を思い、孫が西高を選んでくれた事を大変うれしく思いました。母は大正12年の大震災の日が9月1日の2学期始業式の日だったこともあってかなりの衝撃を受けたりしく度々その時の話を聞かされました。私は昭和20年4月、甲府高女に入学し、4月、5月だけ勉強し6月以降は、現在の国玉町あたりの農家への勤労奉仕でした。そして7月6日の甲府空襲で焼失した甲府高女の校舎を、寿町を通って竜王町(現在の甲斐市)の母の実家まで歩いて行った7日の朝、涙ながらに眺めたのを憶えています。1945年の終戦後、平和な世を70年余り送ることができ、ありがたい事だったと思う一方で希望する高校に入学することができた孫達の今後はどうなっていくのか心配しています。私は国民学校(小学校)の5年生になった頃、父から「女学校の試験を受けるように。必ず甲府高女に入学できるよう努力すること。」と言われました。娘達二人の時は高校入試が総合選抜でどの高校に入れるのか判りませんでした。幸いに二人とも西高に入る事ができました。こうして我が家では運も味方してくれて4代にわたり甲府西高にお世話になってきました。

同窓会の行事などに特にお手伝いする事もせず長い年月過ぎてしまった事を時に、申し訳なかったというような思いを抱くこともありました。大勢のすばらしい先生方や、今も繋がりのある親しい友人にも恵まれ、穏やかにそれぞれの時代を過ごしてこられた事に感謝すると共に、母校の今後の発展、そして、これから巣立って行く皆様方の幸せな人生を心から願っています。

母 清水たね代(旧姓興石)甲府高女24回生

私 小原春乃(旧姓清水)高3回生

娘 谷川佐知子(旧姓小原)高37回生

孫 谷川友菜 西高3年生

**プロフィール** 甲府市在住(昭和26年3月甲府二高卒業)  
現在は地域自治会の経理部及び老人クラブの仕事などをお手伝いしています。  
娘達の家族とは現在同じ敷地内に住んでおります。



## 首都圏甲府西高会

小池英夫

(高31回生)

平成25年4月に甲府西高2期生(高校31回)同期の神宮司易君が山梨県東京事務所に次長として赴任されたのを機に、私との交流が再開しました。その中で「西高(共学)の卒業生の会をつくれないか」という話になり、私の仕事つながりでご縁のあった1期生の鈴木めぐみさん(旧姓塩野)にお声がけし、3人で食事をとりながら話したのが、いま思うと「首都圏甲府西高会」発足に向けたキックオフだった気がします。

そのころ、同窓会東京支部のことはもちろん知っていましたが、首都圏にいる私たちにとっては高校卒業以来の「同窓」話だったため、まずは「西高(共学)」生を集めようということになりました。3人に加えて1期生の西原妙子さん(旧姓小尾)、遠藤芳英さん、2期生の吉呉努さん、4期生の山本好男さん、7期生の小澤雅仁さんが発起人となり、平成26年11月、東京・銀座の東武ホテルで記念すべき第1回交流会が開かれました。

しかし、手探りで準備した第1回の出席者はわずか15人でした。そこで「このままでは…」という危機感から、出席者で1期生の米山正樹さんに事務局を担っていただくことにし、世話人会(という飲み会?)を2~3カ月ごとに開催するなど同窓生探しを本格化させた結果、27年の第2回は41人、昨年28年の第3回は64人と、少しずつですが「会」らしくなってきました。また、この間、同窓会東京支部とも交流が始まっています。

発足から4年目を迎える「首都圏甲府西高会」。共学同窓生の輪を広げる場として、首都圏在住者の方々に気軽に参加していただければと思います。もちろん山梨からの参加も大歓迎です。



プロフィール	1979年	甲府西高卒業	
	1985年	学習院大学卒業	NHK入局
	2012年	報道局政治部長	
	2015年~	報道局編集主幹	



## 「今に生きる西高時代の培い」

倉田 貴根

(高31回生)

山梨県は全国に先駆けて移住相談窓口を東京有楽町の「NPOふるさと回帰支援センター」内に「やまなし暮らし支援センター」をオープンさせたのは4年前の6月。私はそこで、山梨専門移住相談員をしている。山梨県に移住を検討している方の相談にのり、県内の地域や人と相談者を繋ぐ役割がある。仕事や住居、自治体の支援策や山梨の独特な風習などについても相談にのる。移住の不安を払拭し、スムーズに山梨への移住を後押しすることが私の仕事だ。2014年そして2016年には、山梨県が移住希望地ランキングNO.1を獲得した。首都圏の方から見て山梨は魅力がいっぱい詰まった地である。私は毎日、故郷と首都圏とを繋ぐ橋渡し役である「移住相談員」として忙しい日々を送っている。



そんな日々の業務の中で西高時代の体験が大きく影響していると思える出来事がある。

高校2年の夏、当時バレー部に所属していた私は甲府を訪問していたドイツのスポーツ少年団と親睦バレーをすることになった。全校生徒に呼びかけはしたものの、名乗り出がなかったため、バレー部にお鉢が回ってきたというものだ。そこでのドイツの人々との出会いから、世界への憧れを抱き始め、当時国際線のある日本航空へ一直線の学生時代を歩むこととなった。それまでの私は筑波大学への進学と教職への淡い夢を抱いていたが、一気に方向転換へと導かれた出会いであった。

世界を見たいがばかりに入社した日本航空では、ファーストクラスでお客様の背後から要望の有無を判断する必要に迫られたり、クレームをお持ちの方を最後にはグッドコメントをいただけるようなサービスを徹底的に叩き込まれた。それが今、相談員の業務に非常に役立っている。相談者の声にならない声を読み取り、その方の人間性を見抜き、山梨の誰を紹介しようかと考える思考回



路はまさにそのものである。

人口減少が進む山梨県のために少しでもお役に立てるよう、これからも「移住者＝山梨で一緒に暮らしていく人達」を応援していくつもりだ。皆様も機会があったら、是非お立ち寄りください。お待ちしております。

### プロフィール

1960年甲斐市生まれ。敷島中学校、甲府西高等学校、学習院女子短期大学英語学部卒。日本航空にて国内線・国際線客室乗務員として勤務。ヨーロッパ・中近東・東南アジア・オセアニア・アメリカ線乗務する。ニチイ学館にて講師。医療事務・介護事務他病院でのマナー講座等も行う。2015年から「やまなし暮らし支援センター」で山梨県移住相談員。年間2000件の相談を受け、窓口を通じ延べ500人の方の移住を後押しした。趣味は社交ダンス。休日にはダンスパーティに通い、リフレッシュするのが楽しみだ。



## “TEAM”

横田 はつき

(高57回生)

自分の人生で、一番長く続けてきたものは、「バスケットボール」だ。バスケの楽しさは、スピード感やライブ感、何より、TEAMという所だと思っている。仲間と共に「勝つ」と、より一層楽しい。

今思うと、西高時代もそうだった。他の部活もあり、体育館の4分の1を使って練習に励んだ。当時女子バスケ部は人数が少なく、男子バスケの顧問であった逆瀬川先生にお願いして男子の練習にまぜて頂くこともしばしばあった。練習すればするほど、勝てば勝つほど、仲間、TEAMを感じることができるようになってきた。

平成25年10月、山梨クィーンビーズがメインスポンサーの撤退により、存続が危ぶまれているというニュースがあった。小中高時代、チケットを買って見に行ったチーム。大学時代、沢山練習試合をしたチーム。そんなチームが無くなるのは、山梨県民として寂しいことだった。何かできないか。そんなことを思っている最中、声をかけていただき、選手としてチーム再建のお手伝いをするようになった。初期のメンバーは8名。その後選手も増え、Wリーグに復帰したが、有名選手が多数いるトップリーグで同等に戦うのは厳しいものがあつた。自分自身はプロバスケット選手としてだけでなく、小学校教諭で学担として仕事をこなしながらの日々。心が折れそうになっていた。

そんな時、高校時代の友人や、山梨県民の方から応援のメッセージやスポンサーのお話しがたくさん届いた。自分一人で戦っている訳では無かったのだと、改めて、心強く思った。

チームは年々補強を繰り返し、徐々に強くなっていると感じる。しかし、まだまだ足りない。私たちは、応援してくれる人がいる限り、精一杯その気持ちに応えたい。また、子どもたちにももっとバスケの楽しさを知って欲しい。

そして、バスケの楽しさを教えて頂いた我が母校には、心から感謝の気持ちを伝えたい。



**プロフィール** 2005年 甲府西高卒業 東京学芸大学入学  
2010年～現在 山梨県公立小学校勤務  
2015年～現在 山梨クィーンビーズ所属